2009年10月30日　No. 24

白夜の国々　春夏秋冬

ーストックホルムセンターだより　第24号　2009年 秋ー

（独）日本学術振興会　ストックホルム研究連絡センター
Japan Society for the Promotion of Science - JSPS Stockholm Office

目　次

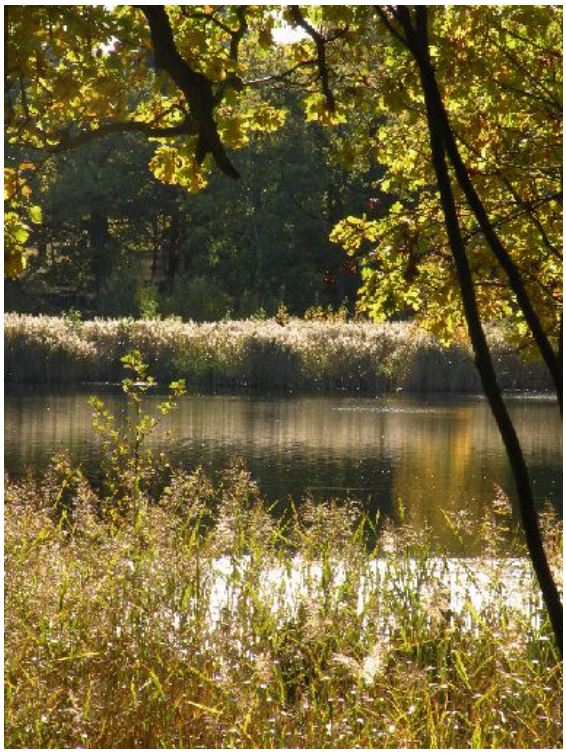
Ⅰ．プロローグ
・北欧その日その日（10）6時過ぎ

Ⅱ．ニュース
・JSPS コロキウム「細胞のリプログラミングと幹細胞研究の最先端」
・フィンランド同窓会セミナー
・スウェーデン同窓会セミナー
・ノーベル賞受賞者発表
・KVA-JSPS 共同セミナー
・NTA プログラムの視察

Ⅲ．レポート
・コロキウム「細胞のリプログラミングと幹細胞研究の最先端」概要
・コロキウム参加報告
・「トゥルクでの素敵な日々」
・黄徳守博士（韓国研究財団）に聞く

Ⅳ．学術研究の動向
・ルンド大学がスウェーデン国内1位の大学に
・岩田　想ロンドン大教授　Gregori Aminoff 賞受賞
・2011年から留学生の授業料徴収へ

Ⅴ．雑記帳
・スウェーデン生き物日記（10）白いブルーベリー
・スウェーデンのお祭り（3）ジャズフェスティバル
・お知らせ



マーケットにて（ストックホルム）

本誌は、ストックホルムセンターのホームページ（www.jsps-sto.com）でも閲覧できます。

1．プロローグ

北欧その日その日（10）　6時過ぎ

佐野　浩

国歌がどのような機会に歌われるかはそれぞれの国によって異なる。「スウェーデンでは？」と尋ねたら、言下にスポーツ大会、との答え。国王が参加する各種行事でも、たまにしか歌わない。学校の卒業式でも歌わない。「だいたい、皆さん、歌詞なんか覚えていません」

スウェーデン国歌のできが悪いせいかというと、そんなことはなく「古き自由な北の国」（Du gamla, du fria）という流麗な詩を民謡にのせて、親しみ易い。独立記念、民心統一、国威発揚などと「国」を特別に主張する必要のない、おだやかな社会のせいかもしれない。

フランス国歌は対照的である。Quatorze Juillet（7月14日）では国をあげて演奏するし、学校での表彰式などでも斉唱した。ただ、歌詞には「血の海を流せ」などとあり、子供に歌わせるのは不穏当、という論議も長く続いている。とはいえ、調子のいいメロディーと歌詞は「La Marseillaise」として定着、改定には至っていない。もともと、それは軍歌であった。1792年4月25日、ストラスブールに野営していた工兵大尉ルジェ・ド・リールによって作詞作曲された。その経緯は「たった一夜の天才」というツヴァイクの小編に詳しい（「人類の星の時間」）。

「誰だって1日24時間、芸術家ではありえない。優れた創造は、つかの間に輝く時間から生まれる」という意味のことをツヴァイクは言っている。「つかの間」をどのくらいの長さとみるかは解釈次第だが、そう言われてみればなるほど、と思う。優れた業績を残しながら、人生の大半は別の活動に費やした人々はたくさんいる。

例えば、イタリアの作曲家ロッシーニ（1792-1868）の活動期間はたかだか若いころの20年であった。1825年、歌劇「ウイリアムテル」を最後に引退し、以後40年以上を美食家として楽しんだ。写楽の正体には諸説あるが、斉藤十郎兵衛（1763-1720）とすると、150枚におよぶ作品は31歳の時の10ヶ月間に集中している。70歳を過ぎてから画家としての才能が開花した人もいる。愛称グランマ・モーゼス(Anna Mary Robertson Moses, 1860-1961)。リュウマチのため本業の刺繍ができなくなり、手慰みに作製した民芸調のカードが注目され、亡くなるまで3600枚もの郷土、民俗画を描いた。伊能忠敬（1745-1818）も晩年に輝いた1人であろう。1794年、50歳にして測量学、天文学を学習、1800年（56歳）から全国の実地測量を始め、「大日本沿海輿地全図」を完成させた。

＊

現代科学の世界ではどうだろう。ただちに思い浮かぶのはジェームズ・ワトソン教授（1928- ）。1953年、遺伝子の本体であるデオキシリボ核酸（DNA）の高次構造を解明した。25歳だった。その功績によって1962年にノーベル賞を授与されたが、DNA以後、実験科学には従事していない。「私の仕事は後進の指導」という意味の発言どおり、不朽の教科書「遺伝子の分子生物学」を執筆したり、コールドスプリングハーバー研究所の所長を長らく務めたりして、分子生物学の発展に貢献してきた。「DNAの成分である4種類の塩基の分子モデルをボール紙で作り、呻吟していた。ある朝、テーブルの上に散乱していたいくつかが偶然、相補的に組み合わさっているのに気づいた」（「二重らせん」）。この瞬間が「星の時間」だったのだろうか。20世紀後半からの歴史の流れを変えた。

それほどたいそうな発見でなくても、たいていの科学者には同じような経験があると思う。後になって考えると「あれが星の時間だったのかな」という瞬間が。面白い発見だとそれが伝説になったりする。例えば、遺伝子の増幅法（PCR）を考案したマリス博士は「ガールフレンドとドライブ中にひらめいた」とか。誰だったか「実験のアイディアはデスクではなく、おしゃべりの最中やトイレの中で思いつく」と言っていた。ツヴァイク風に言えば「誰だって四六時中、科学者ではありえない。優れた発見はのんびりしている時にやってくる」。

ブナの実

私がボストンいたころ「After six」（6時過ぎ）という言葉をよく聞いた。「どんなに忙しくても仕事は夕方6時まで。あとは自分の時間を楽しむ」生活スタイルのようだった。音楽会やクラブに行ったり、スポーツに興じたり、趣味の世界に情熱をかたむける人が多かった。日本では「After six」などと言うとけげんな顔をされるだけだったが、スウェーデンではそれが健在だった。学生から教授まで「仕事は仕事、余暇は余暇」と生活を厳然と律している。

6月下旬、夏至祭が終わると夏休み。「これから1ヶ月は不在です。メールは見ません。電話も繋がりません」という知らせがよく届く。トレッキング、クルージング、園芸、木工、工芸など、仕事からは完全に離れた生活を楽しむ。「そんなに休んだら世界の動きに遅れはしないか」「それがどうした。休みは必要だし、その後にいいアイディアが浮かんでくる。だいたい私の研究にはたいしたライバルもいなから、汲々としてあちこち見回す必要はないのである」

「星の時間」はただ待っていてもやってはこない。それがまたたく状況を整えるのが大切なので、それなら各自の才覚で何とかなる、と研究者たちは承知しているのだろう。北欧諸国の科学研究レベルが高いのは案外、そんなところにも理由があるのかもしれない（JSPSストックホルム研究連絡センター長）。

II. ニュース

コロキウム「細胞のリプログラミングと幹細胞研究の最先端」

2009年9月5日、カロリンスカ医科大学ノーベルフォーラム（ストックホルム）において、スウェーデン・日本共同JSPS コロキウム「細胞のリプログラミングと幹細胞研究の最先端」が開催された。当日は、両国の研究者約70名が集まった。

近年、日本、スウェーデン両国では高齢化の進展や食生活の変化など様々な環境の変化に伴い、アルツハイマー病、がん等の難病、糖尿病等の生活習慣病の治療は深刻な課題となっている。このような中、疾病で機能が失われた臓器や細胞の再生医療は、高い注目を集めている。

今回のコロキウムでは、再生医療の鍵を握る研究分野として、分化した体細胞を未分化な状態に戻す細胞のリプログラミング（初期化）及び幹細胞研究を共通のテーマに掲げ、両国の若手研究者による最新の研究成果発表と協議が行われた。

日本からは、人間の皮膚から多能性幹細胞である人工多能性幹（iPS）細胞の作製に成功した山中伸弥教授（京都大学物質 - 細胞統合拠点 iPS 細胞研究センター長）を始め、当該研究を世界的にリードする同センターの研究者6名が出席し、iPS 細胞に係る最新の研究成果発表が行われた。スウェーデンからは、カロリンスカ医科大学臨床神経学科、分子生物学科及び学内のルドウィグがん研究所、ウメオ大学分子医学センター、ルンド大学幹細胞センターに所属する研究者達が参加し、生物試料の3次元画像を得られる光学的投影トモグラフィーを用いた臓器の分析、ES 細胞の内胚葉系細胞分化に関する研究や神経疾患に用いる幹細胞療法など幅広い分野から研究成果が発表された。また、フィンランド・トゥルク大学に所属する研究者も参加し、遺伝子操作のための DNA 転移技術についての発表が行われた。

これとともに、京都大学とカロリンスカ医科大学からはポスドク、博士課程の学生も参加して壇上での研究発表を行った。コロキウムは指導的立場にある卓越した若手研究者による協議の場であるだけでなく、ポスドクや博士課程の学生など、将来の共同研究を支えるより若い世代の研究者にとって、ネットワーク関係を構築したり、研究発表の経験を積む良い機会となることを目指している。入念に準備された学生達の発表は会場からの関心を集めた。会場の参加者達は、終始アットホームな雰囲気の中、コーヒータイムなどでゆっくりと議論を交わす光景が多くみられた。

本コロキウムで発表された研究成果の一部はまとめられ、来年発行される国際紙『Cell Research』に掲載される予定である。また、京都大学からの講演者の吉田氏からご寄稿をいただいているので、ご参照いただきたい。この場を借りて、ご参加いただいた皆様に感謝申し上げたい（毛利るみこ）。

フィンランド同窓会セミナーと総会

2009年8月31日から9月2日にわたる三日間、フィンランド・エスポーにあるフィンランド国立技術研究センター（VTT）において、フィンランド・日本共同セミナー「持続可能な物質材料開発のためのフェーズフィールド法」が開催された。本セミナーは、フィンランド同窓会長の Antero Laitinen 博士が中心となり同氏が所属する VTT との共催により同窓会セミナーとして企画されたもので、当日は、会員や当該分野の研究者、企業関係者等約30名が参加した。

VTT は、応用研究に重点を置く国立の研究所で、新しい物質材料、バイオ燃料や原子力などのエネルギー、バイオテクノロジーや持続可能な社会のための化学など生化学、産業システム、ビジネスとイノベーション、通信技術等の研究を行っている。特に、VTT では、計算機シミュレーションや各種実験に基づく物理現象の高性能な解析技術を有しており、日本の企業との共同により、多様な条件下での物質の物理現象をシュミレーションできる熱力学平衡計算ソフトの開発を行っている。また、VTT は大阪大学大学院工学科と協力して両国間への研究者派遣も行っており、日本での研究に関心を持つ研究者や渡日経験を有する研究者も少なくないことから同窓会員と交流できる点で本セミナーは良い機会となった。

当日は、開会にあたり Laitinen 博士より VTT の活動概要が紹介されるとともに、JSPS の毛利事務官からは JSPS の活動概要、二国間共同研究事業やフェローシップを紹介した。セミナーでは、VTT の研究者やフィンランド国内の企業関係者とともに、日本からは大阪大学大学院工学科、株式会社計算力学研究センター、宇部興産より研究者、社員の方々を招へいして講演が行われ、先述の計算ソフトを用いた物質材

料の解析についての最新の研究成果などが紹介され、活発な意見交換がなされた。

2 日目には、セミナーと同日開催でフィンランド同窓会総会が開催された。総会では、遠隔地に在住しているため活動に参加しづらい幹部を支える必要があることなどが指摘され、新しい幹事として、フィンランド語による日本の観光ガイドブックを出版した業績を持つ Tapani Jussila 氏（カンキ・インターナショナルリサーチセンター）が迎えられた。このほか、来年度以降、より多くの会員の関心を集めるセミナーのテーマ、同窓会ホームページ案等についての意見交換が行われた（毛利るみこ）。

スウェーデン同窓会幹部会およびセミナー

2009 年 9 月 25 日、リンショーピン大学にてスウェーデン同窓会幹部会合およびセミナーが開催された。幹部会合では、前回行われた同窓会（コロキウムと並行開催）の様子とニューズレター（英語版）への記事寄稿数について毛利副センター長（当時）より報告があった。また、今後の予定として 2010 年 3 月に年次総会を、本同窓会長 Jan Sedzik 氏を幹事として王立工科大学と JSPS の共催の形で開催する予定であることも、現在訪日中で不在の本人に代わって今回議長の Magnus Larson 氏から説明があった。会合出席者からは、3 月の欧州合同同窓会幹部会合と並行して開催されていたコロキウム（宇宙・太陽がテーマ）について、エクスカーションも含めてとても良い企画だったとの意見が出た。欧州合同同窓会幹事会合は、2010 年度は 5 月にフランス・ストラスブールで開催される旨案内があった。

毛利副センター長（当時）からは、今年度 9 月に新たに発足したばかりの再招へいプログラムについて事業説明が行われるとともに、幹部会員が主体となる本プログラムの委員会則作成およびスケジュール調整が議題として取り上げられた。再招へいプログラム選考委員はほどなくして決まり、会則も今後意見交換をさらに進めたうえで、10 月下旬に案を完成させることとなった。今年度の派遣対象期間が短いことから応募者数を懸念する声や来年度の募集については早期開始を求める声もあがり、概ね幹部会員の本事業に対する関心は高いと感じた。

再招へいプログラムの始動によって同窓会員としての存在意義を刺激されたのか、本会合では、派遣前のフェローについても、同窓会会員をもっと活用できるように、日本へ派遣されることが決まったフェローと連絡が取り合える体制や仕組みを望む声があがった。また、年次総会に一度も現れていない一般同窓会員がいることに触れ、これを残念に思うとともに、どうすればより多くの出席者が得られるか、彼らが同窓会に何を望んでいるか調査をした方が良いという意見が出るなど、幹部会合は非常に活発で有意義な話し合いの場となった。

同日開催されたセミナー講師である佐々木力教授（東京大学）を迎えての昼食会をはさみ、午後には佐々木教授による講演「日本の数学における近代史」が同じくリンショーピン大学内にて行われた。講演では、明治維新前後の日本において数学の西洋化がいかに急激に進められたかについての話が中心であった。幕末時代に西洋（この場合オランダ）から数学に関する書物が入ってくる中にあっても、すでに関孝和（1642?－1708）の頃より目覚しく発展を遂げていた「和算」が西洋の数学に引けを取らない水準にあったこと、日本の数学の西洋化は、鎖国を止めて開国した幕末および明治政府下にある軍隊の西洋化とともにあったことなどが語られた。

セミナー終了後は、佐々木教授とともに同窓会会員らはリンショーピン市のガイドツアーに参加した。ツアーは市の中心に位置する大きな教会カテドラルから始まり、市の旧道や当時の司祭の住居などを見学して、リンショーピン市の歴史に親しんだ（安井　瞳）。

講演する佐々木力教授

柳　雄介教授（九州大学）、野本明男教授（東京大学）の講演

2009 年から、JSPS ストックホルム研究連絡センターは JSPS－スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）共同教育研究覚書に基づいて、当地で関心が高い研究成果を有する日本人研究者の講演会を企画・開催している。同企画の最初の講演者として 2009 年の 6 月に横山茂之教授（東大・理研）がスウェーデンを来訪し、タンパク質の立体構造と機能について講演した（詳細はニューズレター23 号を参照）。

第 2 回目はウィルス制御研究を主題とし、柳　雄介（九州大学大学院医学研究院ウイルス学教授）、野本明男（東京大学大学院医学件家研究科病因・病理学専攻微生物学教授）両教授が来訪した。柳教授は麻疹ウィルス受容体（SLAM）の特定によってその後の研究に大きく貢献した。野本教授はポリ

オウィルス（小児マヒの原因として知られる RNA ウィルス）の複製と病原性発現機構を中心に研究を行い、世界保健機構（WHO）でポリオ根絶計画の委員も務めている。両教授の講演会はカロリンスカ医科大学他、ヨーテボリ大学、ウメオ大学でそれぞれ開催された。また同大学当該分野の研究者らとも研究交流を図った。

カロリンスカ医科大学滞在中の各講演会には、いずれも関係学科から学生および研究者が集まり、各講師の話に熱心に耳を傾けていた。当地の研究者らからは「貴重な情報をこの場で共有できたことは大変有難く、今後ぜひ共同研究に発展させたい」等の声が聞かれた。日スウェーデン両国の科学交流の進展のためには有効な企画であった（安井　瞳）。

2009 年度ノーベル賞受賞者の発表

2009 年 10 月、本年度のノーベル賞受賞者が発表された（科学関係では 10 月 5 日生理学・医学賞、10 月 6 日（火）物理学賞、10 月 7 日（水）化学賞）。

生理学・医学賞は、カロリンスカ医科大学のノーベルフォーラムで発表され、報道関係者や学生など多くの人が詰め掛けた。受賞者は、Elizabeth H. Blackburn 氏（米）、Carol W. Greider 氏（米）、Jack W. Szostak 氏（米）の３名となった。受賞理由は、テロメアの解明によって、個人の寿命やがんの発生予測を可能としたことである。

物理学賞と化学賞は、王立科学アカデミーで行われ、海外からの報道関係者も詰め掛け、注目の高さが窺えた。発表会場では、受賞者と電話でつなぎ、喜びや驚きの声を聞くという一幕もあった。

物理学賞は、光ファイバーの画期的な可能性を見出し、長距離の伝送を可能にすることに貢献したとして、Charles K. Kao 氏（英・香港）が、また、電荷結合素子（CCD）センサーの技術開発に貢献したとして Willard S. Boyle 氏（米）及び George E. Smith 氏（米）に贈られることとなった。現代社会で使われている通信や映像の技術は、３氏の貢献がなければ成し得なかったものであり、その礎となったことが高く評価された。

化学賞は、リボゾームの構造と機能を解明した業績が評価され、Venkatraman Ramakrishnan 氏（英）、Thomas A. Steitz 氏（米）、及び Ada E. Yonath 氏（イスラエル）の３氏に贈られることとなった。リボゾームはすべての生物の細胞中にあり、DNA の中にある情報からたんぱく質を合成する機能を持つ。３氏は、このリボゾームの構造と機能を解明したことで、治療や予防に役立つ抗生物質を作ることに貢献したことが受賞理由となった。

今年のノーベル賞は、生理学・医学賞では３名の受賞者のうち２名が女性であり、その他の賞でも女性の活躍が目立つ年となった。また、ノルウェーで発表されたオバマ米国大統領への平和賞は何かと話題になった。

受賞者には、賞金として 1,000 万スウェーデンクローナ（約 1 億 5 千万円）が贈られ、授賞式はアルフレッド・ノーベルの命日にあたる 12 月 10 日に行われる予定。共同受賞の場合は、賞金は功績に応じて按分される（加茂下祐子）。

（参考）ノーベル財団 HP　http://nobelprize.org/index.html

王立科学アカデミーによる受賞者発表会見

NTA プログラムを国立教育政策研究所調査官が視察

ストックホルム研究連絡センターでは、カール･フォン･リンネ生誕 300 周年を記念した日本・スウェーデン学術交流事業の一環として、スウェーデンで実施されている NTA（原語 Naturvetenskap och Teknik för Alla –Science and technology for all の意）プログラムの現場を視察するスタディツアーを実施した。本ツアーには、国立教育政策研究所から教育課程調査官の村山哲哉氏および田代直幸氏、基礎研究部研究員の松原憲治氏の三名が派遣され、2009 年 10 月 3 日から 10 日の一週間、NTA プログラムが実施されているスウェーデンの小中学校や同プログラムを指揮運営する王立科学アカデミー（KVA）他、教育研究省、自然科学史博物館等、関連施設を視察訪問した。訪問先の一つであったウプサラ大学では、リンネの第一の教え子であったカール・ピーター・トゥンベリ(Carl Peter Thunberg 1743－1828)が日本滞在中に採集した植物標本を保管する部屋を特別に見学させてもらうこともできた。各訪問先では、当地の理科教育の研究者や同プログラム担当教員らと意見交換を行い、同プログラムに対する理解を深める好機となった。ツアー終了後、一連の視察訪問を通じて大変刺激を受けた様子の派遣者らからは、本プログラムに関連した研究交流が継続発展できるよう検討を始めたいとの声が届けられた。今回の派遣団訪問が、今後の日本・スウェーデン間における学術研究交流が初中等教育方面にも広がりを見せ、よりいっそう活発となることに期待したい（安井　瞳）。

Ⅲ. レポート

JSPS コロキウム「細胞のリプログラミングと幹細胞研究の最先端」概要

吉田義紀

2009 年 9 月 5 日にストックホルム、カロリンスカ医科大学ノーベルフォーラムにおいて Sweden-Japan Joint Colloquium 「Advances in Cellular Reprogramming and Stem Cell Biology」が開催されました。カロリンスカ研究所の Urban Lendahl 先生をオーガナイザーとして、スウェーデン、フィンランド、日本から計 17 名の研究者による講演がおこなわれました。

Harri Savilahti 氏はゲノム改変の新しい技術について、Ulf Ahlgren 氏は生体内での細胞のイメージングについて、Lou Brundin 氏は多発性硬化症における幹細胞の役割について、Henrik Semb 氏は ES 細胞から内胚葉系細胞への分化について、Thomas Perlmann 氏はドーパミン産生神経細胞の分化にかかわる分子機構について、Rosita Bergström 氏は多能性幹細胞の未分化制御の機構について、Magda Forsberg 氏はマイクログリア細胞への誘導にかかわる転写因子について、Jan Stenman 氏は中枢神経系における脈管構造形成における Wnt シグナルの働きについてのそれぞれ興味深い講演がありました。また日本からは京都大学 iPS 細胞研究センターから山中伸弥先生をはじめ 9 人の研究者による iPS 細胞研究に関する講演がおこなわれました。

各講演のあとには活発な質疑応答があり、幹細胞研究への関心の高さを感じることができました。そして私自身も本コロキウムを通して幹細胞研究に関する課題や今後の展開についてよく考え、確認することができました。

ストックホルムは歴史のある古い建物と自然が調和した大変に美しい都市で、その一角にあるカロリンスカ医科大学は、欧州を代表する研究施設の一つです。これまでに日本からも多くの人が留学し研究をおこなってきました。本コロキウムに参加し、日本から遠く離れた北欧の地で盛んに幹細胞研究が進められていることを目の当たりにし、我々もさらに精進しなければという思いを強くしました。

最後に、本コロキウムの開催を準備された JSPS ストックホルム研究連絡センターの佐野所長をはじめスタッフの皆様に心より感謝申し上げます（京都大学 iPS 細胞研究センター特定拠点助教）。

講演者（発表順、敬称略）
山中伸弥（京都大学）
沖田圭介（京都大学）
Harri Savilahti (University of Turku, Finland)
吉田善紀（京都大学）
井上治久（京都大学）
Ulf Ahlgren (Umeå University, Sweden)
田中孝之（京都大学）
Lou Brundin (Karolinska Institute, Sweden)
Henrik Smb (Lund Stem Cell Center, Sweden)
長船健二（京都大学）
Thomas Perlman (Karolinska Institute, Sweden)
大貫茉里（京都大学）
Rosita Bergström (Karolinska Institute, Sweden)
田邊剛士（京都大学）
Magda Forsberg (Karolinska Institute, Sweden)
山下潤（京都大学）
Jan Stenman (Ludwig Institute for Cancer Research, Sweden)

コロキウム発表参加学生の声（1）

大貫茉里

9 月 5 日、JSPS「細胞のリプログラミングと幹細胞研究の最先端」をテーマにしたコロキウムに参加しました。伝統あるカロリンスカ医科大学のノーベルフォーラムで、文字通り「最先端」の未発表データが飛び交うというなんとも豪華な会の中、若手研究者としてささやかながら私も発表させていただきました。他の先生方の研究成果と比べてしまうとまだどうしても発展途上の内容ではありましたが、初めての英語口頭発表に達成感を覚え、同時に今後の研究に対してより一層の意欲がかき立てられ、また語学力と発表力の重要性を痛感させられ、とにもかくにも大変刺激的な一日を過ごしました。刺激が過ぎたのか壇上ではひたすら緊張してしまい、気持の余裕は皆無でしたので、聴いてくださった皆さん全員にちゃんと伝わっていたかどうかが少々心残りです。

その日発表した先生方とは晩餐会で色々な話ができました。研究の話から始まり北欧建築に見られる特徴、京都の話、趣味の話、最後にはお勧め観光スポットまで教えていただきました。翌日には彼女と佐野先生にもお勧めいただいたスカンセンに立ち寄り、なるほどスウェーデンの原風景を楽しめる観光スポットだということを実際に確認してきました。

私事ばかり書き連ねてしまいましたが、最後に、貴重な経験をさせていただき、また同中から様々な補佐をしてくださった JSPS の佐野先生、毛利さん、安井さん、スタッフの方々に、この場をお借りしてお礼申し上げます（京都大学大学院医学研究科博士課程）。

コロキウム発表参加学生の声（2）

田邊剛士

10月5日夜､テレビをつけると見たことのある風景だった。ノーベル医学生理学賞の受賞者の発表の様子がテレビで行われていた。そこは、私が1カ月ほど前にプレゼンテーションをしたり、他の研究者の発表を座って聞いたりした場所だった。改めて感動し、カロリンスカの空気を思い出した。これまで多くの偉人たちの名前がその会場で発表され、その会場に自分が訪れ発表までする機会が与えられたという経験に、興奮するとともに、貴重さを改めて噛みしめた。欲深い私は、もしも自分の名前がここで読み上げられたらなと想像してみたりもした。ノーベル賞という偶像にしかすぎなかった憧れが、ちょっとは妄想できる夢になる貴重な体験だった。

異なる言語でのコミュニケーション、これがもう一つの貴重な体験であった。私にとって英語で多くの人の前で発表をするのは初めてだった。発表原稿を書き、研究室のメンバーと発表練習をし、飛行機の中でのイメージトレーニング、ストックホルムに着くまでは頭の中は発表一色だった。英語がぐるぐる頭の中で回っていた。しかし、ストックホルムについて空港やホテルまでの移動の中で、ストックホルムのきれいな異国情緒あふれる趣深い街並み、日本語でも英語でもない言語で喋っている人々を見ていると、すっかり英語の事は忘れてしまって緊張も無くなってしまっていた。ストックホルムの町並みや雰囲気は、研究室に毎日こもって研究をしていると狭小になりがちな世界観や視点を振り返り、見直させた。次の日の発表は、予想外に落ち着いて発表ができ、話すスピードや、レーザーポインターの使い方など研究室で教えて頂いた事が落ち着いて発揮することができた。まだまだ練習すべき課題はあるものの、英語口頭発表が恙無くできたのは、研究室のメンバーが貴重な時間を割き、発表練習に付き合ってくださった賜物であると、感謝の念がじわっと心に湧きあがった。この経験は、私の英語口頭発表の技能を上昇させると同時に、英語で外国の方と話をする自信をつけさせてくれた。研究者にとって国籍に関係なくコミュニケーションを取り､情報を収集することは大切な技能だと思う。しかし、自分の英語が外国人に通じるのか、意見を言うのに十分なのかを知る機会は残念ながら日本では乏しい。こういった面で、口頭発表はもちろんのこと、コロキウムのブレイクタイムや懇親会での外国人研究者との会話の中で、四苦八苦しながらもなんとか会話が成立したという経験は非常に有意義なものであった。

ストックホルムでの経験は､私にとって貴重な財産であり、心に残る大切な思い出となった。若い時期にこういった経験を積む機会を与え、さまざまな手助けをしてくださった、山中伸也教授をはじめ山中研究室の皆様、JSPS の職員の方々に心の底から感謝をしております（京都大学大学院医学研究科博士課程)。

JSPS フィンランド同窓会セミナーから：「トゥルクでの素敵な日々」

何　方（Fang He）

ヘルシンキにて　家族と筆者（左端）

2009年6月5日、JSPS ストックホルム研究連絡センター主催による JSPS フィンランド同窓会セミナーに参加できたことは大変喜ばしいことでした。開催地となったトゥルク市では雨が降っていて、例年よりも寒かったのですが、それでも私は最高のリゾート地の一つであるこの街で開催された本セミナーを大変楽しむことができました。

私が初めてフィンランドに来たのは15年前のことでした。それ以来、フィンランドには毎年一、二回ずつ来ています。特に1999年から2000年にかけては、TEKS と Valio 社による支援のもと、一年間トゥルク大学に上級客員研究者として滞在していました。私と家族は20世紀最後の瞬間と21世紀を迎える最初の瞬間をトゥルクで大変楽しく迎えました。私のようにこれだけ早い時期にこのような長期間、日本・フィンランド間での共同研究に携わったり、科学技術の発展に関わる研究において国際競争の真ただ中にあるフィンランドの先進的な能力を経験したりした研究者は、おそらく日本にはそんなにいなかったのではないかと思います。

私の勤めている高梨乳業株式会社は、90年代以降フィンランドで最大の食品会社である Valio 社と、LGG 乳酸菌の利用について独占的協定を締結しています。日本では LGG 乳酸菌といえばフィンランドとおなじみですが、もともとはアメリカで初めて分離することに成功したものです。私は高梨のこの乳酸菌研究および商品開発に初期から携わってきていますが、現在ではフィンランドの研究者達と共に様々な研究活動を行っています。その中で得られた最も大きな成果の一つは、1996年に LGG 乳酸菌で作られた発酵乳（日本製品名「おなかへ GG！」）が厚生労働省から特定保健用食品（特保）の認定を受けたことです。この特保の制度は、食品に健康への効用を具体的に表示することを許可する世界で初めての制度で､食品機能性の公的な評価制度として大変評判が高く､我々の LGG 乳酸菌製品は初めてプロバイオテック製品で特保認

定を受けました。1996 年以降、乳製品および食品産業界は我々に追随して同様のアプローチで特保認定を目指しました。皆さんご存知の森永乳業の「ビフィダスプレーンヨーグルト」や明治乳業の「明治ブルガリアヨーグルト LB81」、ヤクルト本州の「ヤクルト」などもそうです。したがって、90 年代における高梨とフィンランドの研究者達との研究協力は日本での機能性食品市場の開発に大きく貢献したといえます。

1999 年、私はトゥルク大学に派遣され、Seppo Salminen 教授と Erika Isolauri 教授が率いる研究グループに所属し、当時進行中だった LGG 乳酸菌の抗アレルギー可能性についての研究プロジェクトに参加しました。このプロジェクトの成果は、後に 2001 年の Lancet 誌に掲載され、世界から注目を集めました。特に日本では、LGG 乳酸菌のような、ヒトの免疫力を改善することによってアレルギー性疾患の危険性を減らすことができるプロバイオティックの新しい機能性を発見したということが大きく評価されました。

こうした一連の結果によって、日本の研究者達はプロバイオティック細菌が胃腸の調子を良くするようにヒトの免疫にも効果があるかどうかについてさらに詳しく研究するようになり、食品産業とその市場では、プロバイオティックを使用することに強く自信を持つようになりました。これが 2002 年にプロバイオティック製品が花開き、日本で大きなプロバイオティック旋風を起こした主要因の一つと考えられています。私はこの研究プロジェクトを通じて多くのことを学ぶことができ、トゥルクに滞在できて本当に良かったと思っています。この一年で、私は 5 本の論文を書き、EU 内で開催された国際会議でも何度か口頭発表を行いました。それにもかかわらず、私は日本にいる頃よりもずっと多くの時間を家族と一緒に過ごすことができました。

この 15 年来、私はフィンランドの研究者たちの仕事ぶりや質の高い、効率的な働き方についてずっと感心してきました。フィンランドの人々は日本人と似ているところが非常に多く、お互いを理解しあうのも非常に易しいと思います。フィンランドの人はとても誠実でまじめな人々なので、彼らと一緒に働くのはとても楽しかったです。

フィンランドに派遣される前、フィンランドは冬がとても寒いから、などと私は聞かされていました。ところがこちらへ来てみれば、家族と過ごした現地での生活は年中快適なものでした。フィンランドの夏は想像以上にとても素晴らしいものでした。1999 年のフィンランドで家族と過ごした夏には、数え切れないほどの思い出ができました。ある日には、トゥルクで偶然にも Martti Ahtisaari 元フィンランド大統領と同じレストランに居合わせたこともありました。Martti Ahtisaari 元大統領とその夫人がレストランに来たとき、周りの誰も驚いたりしていなかったことを私は今でも覚えています。元大統領夫妻はごく一般の客として来店し、他の客たちと同様に食事を楽しんでいました。お店の雰囲気はとても和やかで、落ち着いていました。店内ではレストランのオーナーの息子さんがピアノを演奏し、Ahtisaari 元大統領や他のお客からチップをもらっていました。そのときの様子は、フィンランドの自然で民主的、そして平和なところがよく現れていた場面の一つだったと私は思います（高梨乳業株式会社商品研究所）（安井　瞳訳）。

インタビュー：黄徳洙（Deok-Soo Hwang）博士（韓国研究財団スウェーデン駐在所長）

JSPS 安井（以下 J）：今年になって KOSEF（韓国科学財団）から NRF（韓国研究財団）へと名称が変わりましたね。その経緯について、簡単にお話いただけますか？

Dr. Hwang（以下 H）：2008 年 2 月に李明博大統領の政権になってから、大々的な省庁組織改編が行われました。その一端として、旧教育部と旧科学技術部が合併して現在の教育科学技術部（MEST）となりました。KOSEF は旧科学技術部系の行政組織でしたが、旧教育部にも同様の研究助成機関の KRF（韓国研究財団）がありました。組織改編以降、KOSEF も KRF との合併に向けて準備を行ってきましたが、ついに今年の 6 月、それが実現されて NRF に生まれ変わったというわけです。

9 月 11 日には MEST の安秉萬（Byong-man Ahn）長官がスウェーデンの教育研究省を訪問し、科学技術交流に関する一般協定に調印しました。韓国政府はスウェーデンを、研究協力を行ううえでの将来の良きパートナーであると考えています。私は調印式に立ち会うことでその瞬間の証人となるができて、とても嬉しく思っています。

J：スウェーデンにいらっしゃるまでの Hwang 博士ご自身についてお聞かせください。

H：1994 年に大学を卒業して以来、私は旧 KOSEF にずっと勤めてきました。KOSEF 入職以後はほとんど、国際協力関係の部署に配属されてきました。これまでに、ドイツや中国、インドを対象国とするプログラムを担当してきましたが、残念ながら日本を担当することはありませんでした。

J：ところで Hwang 博士のご専門は何ですか。

H：私は社会学の専攻です。学部生の頃は行政学について勉強してきました。KOSEF という、科学技術に特化した機関に勤めていたとはいえ、私の専門は行政学だったのです。そこで、私は科学政策で博士号を取得しました。私は科目履修生として 7 年間大学院に通いました。幸いにも KOSEF が職員に対する教育支援制度を設けていたのでそれを利用して通学しました。

J：7 年間もそんな生活をされていたとは大変な努力家ですね。では、現在の Hwang 博士の NRF での活動について教えてください。

H：NRF 本部はそれぞれの駐在所（現在日本、中国、アメリカ、スウェーデンの 4 カ所）に一人ずつ職員を派遣しています。現在、当オフィスを拡大させることを考えているところです。昨年、JSPS のオフィスを訪問させていただいたとき

（※本ニューズレター21 号参照）、職場の環境や JSPS の行っている活動の多様さに私は感心しました。このニューズレターも年に 4 回も発行するなんて、とても大変でしょう！

J：ええ、まあ（苦笑）。

H：私たち NRF の当地での最重要課題は協力ネットワークの構築とその促進です。2005 年に事務所を開設して以来、スウェーデンとの科学分野における二国間交流を戦略的に拡大することを目指しています。韓国はこれまで、北欧諸国との結びつきが弱かったです。多くの研究者は、日本と同様、英語圏であるイギリスやアメリカを重要視してきていたからです。したがって、これまでの長い間、北欧諸国との研究交流はほとんどありませんでした。

私たちは今、一年に 2－4 回の二国間共同セミナー開催したり、研究者交流を行ったりしています。現在、スウェーデンの研究助成機関であるリサーチカウンシル（SRC）、スウェーデン研究・高等教育国際協力財団（STINT）の 2 つの機関と覚書を結んで事業をいくつか実施しています。それぞれの事業規模はまだ大きくありませんが、私たちはそれらを拡大できればと思っています。STINT とは、面白いプログラムを実施しています。確か、JSPS も以前同じようなプログラムを STINT と実施していたかと記憶しています。それは、初期のネットワーク構築に焦点を当てて助成するというものです。始めて 2 年目の今年度は、8 つのプロジェクトが採択されました。助成期間は 2 年間で、双方が自国研究機関に対してそれぞれ、年間 10,000€を助成します。

また、若手研究者への支援を行うプログラムを立ち上げることが目下、私の最大の関心事です。KOSEF 時代に担当していたドイツとは、ドイツ学術交流会（DAAD）と若手研究者を交流させるサマープログラムを実施していました。それがとても良いプログラムだったので、ここスウェーデンでも同じようなプログラムを立ち上げることができればと今考えています。

黄德洙博士

J：スウェーデンの研究環境や研究者を韓国と比較して、何か気づいた点はありましたか？

H：スウェーデンの研究者達は、学際的な研究分野での活動がとても優れていると思いました。スウェーデンで研究者達に会って名刺をもらうと、そこにはとても面白いポジション名が書かれてあるのに皆さんも気づくことができるでしょう。例えば、王立工科大学の物理学部の研究者を訪ねると、彼らが生物学部の研究者達ともとても活発に共同作業をしている姿をよく見かけます。これはもちろん、世界的な潮流です。新しい技術や知識を手に入れたければ、異分野の研究者との交流は必要不可欠です。スウェーデンの人々は、その種の哲学や学術的傾向をよく理解して活動していると思います。これをもっとも具現化しているのが AlbaNova 大学センター（※ストックホルム大学と王立工科大学の物理、宇宙、生物化学分野における共同研究施設）でしょう。ある韓国人研究者も、AlbaNova を訪問した際、とても実際的であることに感心していました。

もう一点は、スウェーデンには私の知る限り、行政主導の研究所がほとんどなく、基礎研究はほぼ、教育機関でもある大学によって行われているということです。日本にも理研などの研究所がありますが、韓国では、行政主導の国立研究所の占める予算とその人員数はとても大きいです。スウェーデンではそのような機関が見当たりません。

J：スウェーデンやその他北欧諸国とは、どのような分野で研究交流が活発に行われていますか。

H：まだ活発だと言えるまでの交流分野はありませんが、その予感があるところはいくつかあります。エネルギー、環境、その他先端研究分野がそうです。韓国は IT 方面が得意ですし、スウェーデンでは医学研究が大変優れています。なので、そうした分野へも研究交流を広げられればと思っています。その兆候はすでにあり、例としては韓国の韓林大学がウプサラ大学と学術交流の覚書を締結しました。

先に挙げたような分野は日本でも同じように得意分野だと思います。JSPS はすでに多くの研究交流をスウェーデンと行っています。私は、将来韓国も同じように交流が拡大できるようになると非常に前向きな気持ちでいます。私たちはまだ始まったばかりだとも言えるでしょう。

昨年、ストックホルムオフィスの佐野所長とは、韓国・日本・スウェーデンの 3 カ国交流プログラムのようなもの、例えば 3 カ国共同のシンポジウムの実施について少し話をしました。日中韓ではすでに同様のプログラムがありますが、ちょうど私たち両国のオフィスがスウェーデンにあるのですから、良い機会ですし、いつか実現させたいと私はずっと思っています。JSPS はストックホルムオフィスができて 10 年ぐらいですか？（J: 2001 年からなので約 10 年です）私は JSPS からももっと多くのことを学びたいと思っています。そう、このニューズレターについても、です（J、H：笑）。（終）

Ⅳ. 学術研究の動向

ルンド大学がスウェーデンでトップの大学に

「Times Higher Education」が 2009 年世界のトップ 200 大学を発表した。トップ 3 は、米国ハーバード大学、英国ケンブリッジ大学、米国イェール大学、と昨年同様の顔ぶれであり、上位 16 位までは、米国と英国の大学が占めている。その中で、ルンド大学が昨年の 88 位から大きく順位を上げ、67 位にランク付けされた。これにより、ルンド大学は昨年スウェーデン国内トップであったウプサラ大学（今年は 75 位）を抜き、国内最高位のランク付けとなった。なお、北欧諸国の大学では、コペンハーゲン大学の 51 位が最高位であった（加茂下祐子）。

（参考）Times Higher Education　HP
http://www.timeshighereducation.co.uk/hybrid.asp?typeCode=438

岩田 想ロンドン大学教授がスウェーデン王立科学アカデミーより Gregori Aminoff 賞を受賞

2010 年の Gregori Aminoff 賞が発表され、インペリアル・カレッジ・ロンドンの岩田想教授が受賞することとなった。岩田教授は、東京大学博士課程修了後、スウェーデン・ウプサラ大学講師等を経て、2000 年よりインペリアル・カレッジ・ロンドンに勤めている。膜たんぱく質の構造解析の業績が評価されての受賞となった。

Gregori Aminoff 賞は、1979 年よりスウェーデン王立科学アカデミーが、結晶学の分野の功績を表彰しているもので、日本人研究者の受賞は、2007 年の飯島澄男氏以来、２人目となる。受賞者には、スウェーデン王立科学アカデミーより１０万スウェーデンクローナ（約１５０万円）が賞金として贈られる（加茂下祐子）。

（参考）スウェーデン王立科学アカデミー　HP
http://www.kva.se/en/pressroom/press-releases-2009/Master-of-the-creation-of-protein-crystals-receives-the-Aminoff-Prize-2010/

2011 年から留学生への授業料徴収開始

政府は 2010 年度予算案において、スウェーデンにいる外国人留学生に授業料の支払を義務付けるよう提案した。

「スウェーデンは現在、外国人留学生から授業料を徴収しない数少ない国の一つである。しかしながら留学を希望するスウェーデン人学生はその国で授業料を支払わなければならない。外国人留学生の授業料を支援することは、納税者にとって理屈に合わないことである。これはスウェーデンの高等教育財政を削り取っているようなものである」と、高等教育研究省の Tobias Krantz は述べている。

法案では、外国人留学生（欧州経済圏外の国出身）は 2011 年秋学期から、自分の授業料を負担しなければならないとしている。大学およびその他高等教育機関は、それぞれ独自に徴収額を決定する。

「教育は今やグローバルな市場となった。学生は世界中の高等教育機関の中から選ぶことができる。スウェーデンの高等教育機関もこの市場の中で、学費を無料にすることではなく、高い品質でもって競争を勝ち抜いていくべきである」と Krantz 氏は述べる。

授業料導入は奨学金制度と統合される。政府はこの秋に詳細も含めた特別法案を提示する予定である（安井　瞳）。

（参考）Government Offices of Sweden　2009 年 9 月 11 日プレスリリース

ストックホルム市立図書館

ヘルシンキ市内

V. 雑記帳

スウェーデン生き物日記（10）　白いブルーベリー

佐野　浩

マンボウ博士こと北　杜夫氏は、若いころ（多分、今も）トーマス・マンに傾倒したという。ある時、仙台の街中で「トーマス・マン」と大書したカンバンを見かけ、「すわ新作」とあわてて飛びこんだら「トマトソース」だった、とどこかに書いていた。

そんな訳で、作家の故郷ドイツへの憧れを絶ちがたく、水産庁の漁業調査船の船医になった。世界周遊航路の途中でドイツにも寄航する、と聞いたからである。念願かなって、冬のさなかにハンブルグにたどり着いた。1959 年のことだった。

トーマス・マンには「トニオ・クレーゲル」という短編があり、特に愛読、ペンネームまでそれに因んだといわれる。その中にインゲという少女が登場する。「金髪のインゲ」とトニオはひそかに憧憬するが、もちろん夢はかなわない。ドイツに来たからには、その「金髪のインゲ」的な少女にはいくらでも会えるのではないか、と期待したが、ひとりもいなかったという。「まあこの世はそんなものである」と嘆息している（どくとるマンボウ航海記）。

ところで、マンボウ先生はそんなにがっかりしなくてもよかったのですね。ハンブルグでなくてストックホルムに着いていれば、「金髪のインゲ」などゴマンといます。だからどうということもないけれど、「金髪、碧眼族」の世界分布は、スカンディナビア半島が中心という調査結果がある。特に、スウェーデン中部地方と、ボスニア湾をはさんだ対岸のフィンランドでは優占種で住民の 80%以上を占める。

現世人類は 20 万年から 10 万年前にアフリカを起源とし、世界に分布を広げた。スカンディナビア半島には 15,000 年前に到達したらしい。随分、時間がかかっているが、これは突然変異を待っていたため、という説がある。つまり、南方では強い太陽光線（紫外線）から身を護るために、表皮直下に厚いメラニン色素を沈着させなければならない。北方では、遮光は必要なく、かえってビタミン合成のために陽光は必須となる。そこで、メラニン合成系にかかわる酵素遺伝子が不活性になった変異個体が、生存には有利になったのではないか、という推定である。

冬至のころ、ストックホルムでの日照時間は 5 時間足らず。曇天も多く、薄暗い日々が続く。南国からの留学生や移民が体調を崩し易い。ビタミンDの不足が原因のひとつという。現地人たちは元気いっぱいだから、「金髪のインゲ」（スウェーデンではさしずめ「金髪のアンナ」）は環境にうまく適応して進化した成果であろう、と納得した。

＊

植物の場合、アントシアンという色素が紫外線防御の役割を担う。紫外線に曝される高山植物が華やかなのは、それを吸収する色素含量が高いからである。アントシアンを多量に含む植物といえばブルーベリーがある。*Vaccinium* 族の総称で、世界では数十種も記載されている。北欧の森林には特にゆたかで、スウェーデン語で blåbär（ブローベール）という。直訳すれば blueberry になるのだが、英名は bilberry（*V. myrtillis*）、北米の blueberries（*V. angustifolium* など）とは異種でややこしい。

ブローベールとしては障害よけのためにアントシアンを生産しているのだが、ヒトにも有効らしく、果実は下痢、伝染病、皮膚病などの治療に使われたと伝えられる。果汁は青紫色で皮膚や衣類につくと除去しにくい。ジュースを飲むと歯が染まるので、子供たちに歯ブラシの使い方を教える指標にしたという。磨いたあとでも紫が残っていればダメというわけである。

夏休み、人は Stuga（小さな山小屋）に行ってしまう。夕方「さあ、ケーキを作るから裏の森にいってブローベールを摘んできな」。採りたての果実を洗いもしないで生地にのせてオーブンで焼く。味は・・・焼いた人の腕によるのだが、たいていは空腹だからどれも美味に感ずる。子供のころからこういう生活をしているスウェーデンの人々が、野生に親しむのは当然のこと、と思った。

＊

果実にはできの良し悪しがあって、大粒のがたくさんあると闘志がわく。だから散歩していても、なんとなく横目で観察してしまう。そんな時に、白い果実が目にとまった。ほのかに緑がかってはいるものの、クリーム色のそれはとてもブルーベリーには見えない。知人の植物専門家に尋ねたら、白いブルーベリーはこれまでも記録はある。ただ、非常に珍しく、彼は見たことがないとのこと。「味は野生型と同じか、それ以上である、博物館に報告したらどうか」。

それはアントシアン合成系が不活化した突然変異株のようだった。10 平方メートルくらいのところでは優占種となっており、どうやら、ひとつの変異株が十数年かかって増えたものらしい。ここでは紫外線防御は必要ないのかもしれない。なにやら「金髪、碧眼族」の出現と似通っているようにも思われた。とすると、あと 15,000 年もたつと、北欧中のブルーベリーは全部、ホワイトベリーに転ずるのではないだろうか。林床いっぱい、白いビー玉を転がしたようで、きれいだろうな、見られないのは残念です（JSPS ストックホルム研究連絡センター長）。

スウェーデンのお祭り（3）ストックホルム・ジャズフェスティバル

安井　瞳

スウェーデンといえば何を思い浮かべる人が多いだろうか。北欧デザインの家具や食器、ガラス製品やポップな雑貨の数々、あるいは高福祉社会、はたまた森と湖に囲まれた美しい自然、等々。どれも正しい。しかし、もう一つ忘れてはならないのが、世界的に有名な歴史あるジャズフェスティバルが開催される国であるということだ。ジャズ発祥の地がアメリカであることを思うと意外に思う人があるかもしれないが、スウェーデンに限らず北欧はジャズが盛んだ。今年で 26 回目を迎えたストックホルム･ジャズフェスティバルは、今年は 7 月 15 日から 19 日の 5 日間にかけて世界中から 60 組以上ものアーティストが参加して開催された。近年はジャズだけではなく、R&B やブルース、Hip Hop などジャズに関連のある音楽のミュージシャンが出演してますます盛り上がっている。今年は海外から Erykah Badu や Sonny Rollins、Jake Shimabukuro などの出演があった。また、このフェスティバルのすばらしさは出演するアーティストの豪華さだけではなく、会場のロケーションの良さにもあるだろう。会場となるシェップスホルメンは都会の真ん中に浮かぶ数百㎡にも満たない小さな島で、近代美術館や建築博物館などがある。周囲はバルト海内海のストルンメン湖に囲まれており、湖を越えて向こう側には旧市街のガムラ・スタンの街並みや市庁舎などが眺められる。

ストックホルムの 7 月は日がとても長い。日没は 10 時前後だから、いつまで野外ステージにいても日本の夕方ぐらいの気分でいられる。日本でも今、夏はあちこちで野外音楽フェスティバルが盛んだが、チケットの入手は大きなイベントだと難しい。それがストックホルムとなると当日券で易々と入場ができてしまうのだから素晴らしい。この日、仕事を終えた後 Jake Shimabukuro を目当てに開演 30 分前に着くと、なんと前から 3 列目の席に座れてしまった。日本の感覚で言えば、入場できるかどうかも怪しいところだったが、こんなところでスウェーデンという国の人口の少なさを妙に実感する。もちろん、Jake Shimabukuro のステージ会場はその後まもなく観客で埋まり、彼自身初めての欧州公演は大成功に終わった。会場を訪れる観客は、ジャズというジャンルも手伝ってか思ったよりも年齢層は高いように感じた。ストックホルムの夏の夜は湿気もなく爽やかで、湖を越えてくる風に吹かれながら、人々は思い思いに心地よい音楽と夏の明るい夜を楽しんでいた（JSPS ストックホルム研究連絡センター国際協力員）。

お知らせ（1）　新しい職員の紹介

10 月より文部科学省大臣官房国際課から、副センター長として着任いたしました。北欧といえば、従来からの「高福祉の国」という要素に加え、最近では、スウェーデン発の家具や衣料品などが人気ですが、まだまだ知られていない国だと思います。科学技術のみならず、教育、文化、日々の暮らし等、様々なことに好奇心を持ち、精一杯、任務を果たしたいと思っています（加茂下祐子）。

オフィスのメンバーが新しくなりました。佐野 浩（所長）、加茂下祐子（副センター長）、Lisa-Mi Swartz（アシスタント）、安井 瞳（国際協力員）の 4 人です（安井　瞳）。

お知らせ（2）　新しいホームページと英文ニューズレターの発行

このたび、本センターのホームページをリニューアルしました。まだ全てのページを更新したわけではありませんが、新しいデザインでより見やすくなりました。内容もより充実したものとなるよう努めたいと思います。

今年 9 月に本センター英文ニューズレター『Japan the Horned Islands』第 4 号が発行されました。日英両語のニューズレターはセンターホームページ（http://www.jsps-sto.com/home.aspx）に掲載しています（安井瞳）。

「白夜の国々 春夏秋冬」　ストックホルム研究連絡センターだより　第 24 号
編　集：安井　瞳
発行日：2009 年 10 月 30 日
発行元：日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター
連絡先：JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171-65 Stockholm, Sweden　TEL: +46 (0) 8 5248 4561　FAX: +46 (0)8 31 38 86
Website: http://www.jsps-sto.com/　E-mail: info@jsps-sto.com